

## 12. 『子供の夢』の綾子さんの冒険

今回より本文中のエピソードなどを、断片的にはあるが、紹介したいと思う。

主人公の「綾子」さんは「蒲公英」摘みを思案中。そこに出現した「撫子色の眼」の白兎追跡が始まる。兎穴落下中には「甘納豆」の容器をみつけたり、地球を突き抜けて「亜米利加」まで落下するのではと考えたり、飼猫の「ミイヤ」のことを懐かしがったりする。

地下世界の出口のない部屋では「メシアガレ」と表示された飲物や「ビスケット」をみつける。後者を食べて天井に届くほど背が伸びた綾子さんは自分の足に「新しい空気草履」を贈ることを検討するのだが…。

ここでちょっと本文から離れて空気草履について一言。そもそも空気草履とは何？ 空気のできた草履？ というのは変なので、空気で膨らませた草履？ かとも思われるが、どうにもはっきりしない。幸いにも小学館『日本国語大辞典』に見出があり、

くうき - ぞうり ・ザリ【空気草履】〔名〕明治中期の草履の一種。踵（かかと）の部分に皮でひだをこしらえバネ仕掛けとしたもの。 \*遊動円木〈葛西善蔵〉「浪子夫人はすつと空気草履を穿（は）いたまま飛び乗って」

とある。おそらく、空気のように軽く感じる草履というような意味なのであろう。ぜひ一度実物を見てみたいものである。

さて、自分が友達の誰かに変わってしまったのでは、と悩む綾子さんは次々に友達の名前を思い浮かべてみる。秋子？、鞠子？、町子？、玉子？、仙子？、谷子？、米子？ さらに掛算や地理の復習を試みた後、歌を歌ってみるがどうもうまくいかない。「昔丹波の大江山 | 鬼共数多籠りみて | 鬼が島をば打たんとて | どうしてそんなに遅いのか」（どんなふうこれを歌ったのか、非常に興味深いところではある）

その後、涙の池では最初「鱈」と間違えてしまった鼠や、家鴨、鸚鵡、鷺、鳩、ペリカン、蟹、水馬、狼、栗鼠、カンガルー等々に遭遇する。みんなで岸に上がると「駝鳥」が、身体を乾かすためにかけっこを提案。綾子さんの懐にあった「ビスケット」がかけっこの賞品となる。綾子さん自身は自分の「指環」を贈られる。

涙の池で出会った動物たちが去った後、再び白兎が登場。綾子さんは「女中のお鍋」に間違えられ、用事を言い付けられる。「宇佐木四郎」という表札のある家の一室から出られなくなった綾子さん。白兎は綾子さんを追い出すために「伊之」を派遣するが、失敗に終わる。なんとか白兎の家を逃げ出した綾子さんは芋虫に会い唱歌をおさらいすることになるが、その歌詞は以下のような「イツツブ唱歌」となってしまう…

小さな流れの板橋へ | 肴を啣えて来かゝりし | 一つの犬がありました | 流れに映りし己が影  
私に能く似た犬が居る | 矢張肴を啣えてる | ほんとに私に良く似てる | 啣えた肴も良く似てる  
良く似て居れども私のより | いくらか大きいあの肴 | 何んとか云うて騙かして | あれをばこちらへ奪つてやろ

おや——私の真似をする | あれ——私のする通り | いち——同じ真似をする | 失敬極まる咬みつくぞ

エ、——口惜しい事をした | 折角啣えて来た肴 | うっかりワンと吠えた為 | 流れに落とした口惜しや

おやあの犬は泣いて居る | お前も矢張落としたな | それでは泣くも無理ぢやない | 私でさへも惜しいもの

その後たどりついた公爵夫人邸の入口では「鯛馬丁」と「蛙馬丁」に出会う。邸の中には、公爵夫人が「化猫」と呼ぶところの「金目の真黒な猫」や、「お皿や、お鍋や、杓子や、徳利や、それよりも驚いたのは、包丁や、山葵卸や、火箸や、薪」を投げつける女中がいる。公爵夫人は女王陛下と「庭球」をするために出かける。

綾子さんは邸の外で再び金目の黒猫に出会う。綾子さんが「貴嬢、先刻の化猫ね」と話しかけると猫は「私？。貴嬢あんまりねエ。私、化猫ぢやなくつてよ。私、化けなんかしないわ」と答える。続く会話でも猫は常に女の子の言葉遣いで話すのだが…

さて、ここでもう一度本文から離れ、Cheshire Cat の性別について少し考えてみたい。というのも、私がそれまでに読んだ日本語訳は少なくとも女の子の言葉遣いからはほど遠いように思われたためである。

しかし、原文から性別を特定することはほぼ不可能である。Cat は雌雄どちらにも用いられるし、かの生物を指す代名詞は常に it であるため、どちらとも断定しがたい。それでも、気になる個所が皆無という訳でもない。まず、アリスが初めて話しかける場面。

"Cheshire Puss," she began, rather timidly, ...

という呼びかけの中の Puss は、どちらかというとな女性的な感じがする。しかしこれは単に猫一般の標準的呼称とみなすのが妥当であろう。もうひとつは、ハートの女王がクローケータラウンドで王様に頼まれて Cheshire Cat の斬首を命令する場面。

"Off with his head!" she said without even looking round.

ここでは his とあるので、これを額面通りに受け取るならば男性ということになろう。しかし女王がこのとき Cheshire Cat を見てもいないのであれば、この発言をその性別を意識してのものとはみなすことは非常に無理であろう。

原文や英語の辞書をあちこちひっくり返しているうちに、英語ではなく例えばドイツ語のように名詞に性のある言語ではどう表現されているのだろう、と思いついた。そういえば『アリス』の最初の翻訳とされるドイツ語訳は作者自身が出版を企画し、その内容も詳しく確認していたらしい。現在ではその 1869 年版のドイツ語訳の復刻が Dover Publications から刊行されている。この本を確認すればすぐにも疑問は解決するはずだが…

原文で大文字の Cheshire Cat が初めて登場する場面は、以下のように記載されている。

... when she was a little startled by seeing the Cheshire Cat sitting on a bough of a tree a few yards off.

この個所に対応するドイツ語訳は、

... als sie einem Schreck bekam; die Grinse=Katze saß nämlich wenige Fuß von ihr auf einem Baumzweige.

とある。Katze は雌雄どちらにも用いられるとのことだが、文法上は女性である。また、この個所以降、この Katze に対する代名詞には常に sie すなわち「彼女」が用いられている。ということは、作者は Cheshire Cat を女性的なるものとして意識していたのではなかろうか？

というようなことを考えながらその先を読み進んでみる。第 6 章はすべて Katze や sie で統一されていた。次に彼女(?)が登場するのは第 8 章となる。この章でも最初は彼女(?)に変化はなく、Cheshire Cat と話をしているアリスに王様が「誰と話しているのか？」と尋ねる場面でも、王様が物珍しげに見上げる the Cat's head は、ドイツ語訳では den Katzenkopf となっている。

しかし順調だったのはここまでで、その直後、アリスが彼女(?)は a Cheshire Cat だと告げる場面で決定的な変化が表面化してしまう。そのドイツ語訳がなぜか、ein Grinse=Kater となっているのである。Kater は Katze とは異なり、特に雄猫を意味する言葉である。そしてこの場面以降、Cat は Kater に統一され、その代名詞も er すなわち「彼」が用いられることとなる。

この突然の変更は作者自身が意図したものなのだろうか？ そもそもは、神出鬼没の笑いに性別を問うこと自体がナンセンスなのだろうけれど、それにしても、今までの私の苦労は一体…